ISSN 1341-4046

埋文やまがた

1998年1月31日
第9号

寒河江市高瀬山遺跡水辺の遺構

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
YAMAGATA PREFECTURE ARCHAEOLOGY CENTER
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL 023-672-5301㈹　FAX 023-672-5586

遺跡トピックス

水辺の遺構

木組み遺構（左手前）石組み遺構（右奥）北東から撮影

「水辺の遺構」が高瀬山遺跡の平成９年度ハイウエーオアシス地区の発掘調査で確認されました。縄紋時代晩期（3,000～2,300年前）のものと考えられます。場所は寒河江市柴橋の最上川から60mほど北側に離れた段丘のすぐ下の湧水地です。本遺跡では近年の発掘調査で奈良・平安時代を主に、旧石器から中世の遺構が多数確認されています。

水辺の遺構は木材を組み合わせた木組み遺構と，石を配列し木材で囲った石組み遺構がありました。共に水辺に張り出すように作られています。あわせて木材，トチの実やクルミの殻も多量に見つかっています。

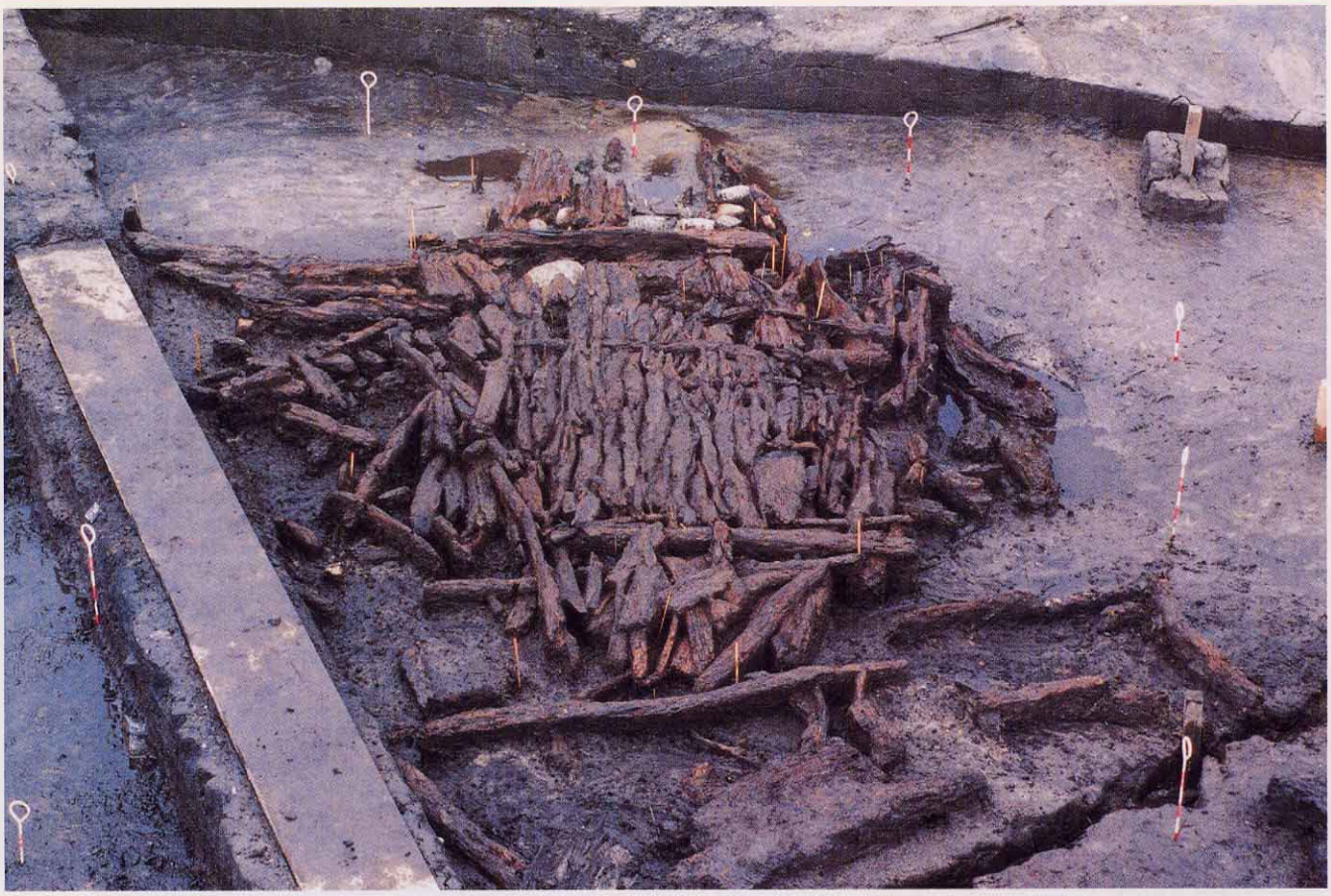
縄紋時代の食物植のなかでも，木の実は採集が容易で栄養価が高いものです。縄紋人の食生活の重要な割合を占めていました。

特にトチの種子は長期保存ができるものです。縄紋時代の後半には集中して採集されていたようです。トチの種子にはシブ（タンニン）があるので，食用とするには水にさらしたり，灰の汁でシブ抜きの作業をいくどもしなければなりません。

トチ・クルミの実出土状況（石組み遺構の南側）

水辺の遺構がどのように使われていたのか正確にはわかっていません。けれどもトチの実の皮を剥いだり，シブを抜く準備作業としての水づけをしたり，加熱後の処理をおこなった施設でなかったかと思われます。

（小林　圭一）



木組み遺構　南から

木組み遺構の水取り入れ口？　北から

石組み遺構　南から

赤色漆で塗られた土器　縄紋時代晩期後葉

木組み遺構の型とり

木組遺構は全国でも十数例しか確認されていません。中でも高瀬山遺跡の例は非常に状態が良く貴重な資料といえます。出土した木材は非常に脆(もろ)くそのままの形で取り上げたり残すことは困難な状態でした。

そこで将来に遺構を残す一つの手段として，型とりしておくことにしました。レプリカ（複製）を作成するための型とり作業を５日間の工程で実施しました。

❶　木で組まれた遺構にラテックスゴムを塗ります。

❷　和紙を貼り付けた後に補強用の麻を敷き、石こうを流し込みます。

❸　補強の木枠を組んで石こう型と接着させます。

❹　石こう型を取り去ります。

❺　ラテックスゴムをさらに取り去ります。

❻　石こう型とラテックスゴムを組み合わせて、表面を掃除して終わりです。

山形県立博物館佐久間洋氏撮影

トチ

トチモチ

トチの実と種子

トチノキ

北海道から九州まで広く分布しています。山の谷間に多い落葉高木です。花は5－6月に咲きます。径約1.5cmの美しい白色でやや紅色をして，蜜を多く分泌します。果実は3片に割れ開き，通常1個の種子が入っています。

種子はシブ（タンニン）をぬいて初めて食料となり，今でもトチモチとして食されています。

クルミ

クルミの実（核）

クルミノキ

北海道から九州まで広く分布しています。川沿いまたは湿地に生える落葉高木です。花は5月頃に咲き，細長く垂れ下がります。果実の中に核があり，なかの種子は多量の蛋白質と脂肪とを含んでおりなじみ深い食品です。オニグルミやカシグルミなどあります。

果実は川の流れにつけたり，土の中に浅く埋めたりして皮が腐るのをまって，核を洗い乾かして貯蔵します。

高畠町の押出（おんだし）遺跡から主にクリとクルミ，それに肉や血を使ったクッキー状炭化物が出土しています。

これは現代風にアレンジしてよみがえらせた焼き菓子です。

赤外線テレビによる文字の解読

墨書土器

遊佐町の上高田遺跡から，「弓削連（ゆげのむらじ）」と墨書きされた土器が見つかりました。

弓削氏は河内国（大阪府）の豪族です。奈良時代末に孝謙上皇の側近として権力を振るった弓削道鏡の一族です。さらに「連」は朝廷が豪族に与えた位が高い称号のひとつです。弓削氏と出羽国との関わりがうかがわれます。

ほかに「舎人（とねり）」と書かれた土器も出土しています。舎人は豪族の子弟などが任命された役職で，天皇の護衛などにあたりました。

墨書された土器はどのように使われたのでしょう。土器の所属を示すとする説，字の練習に書いたとする説，まじないの呪符として使われたとする説など様々あります。本遺跡からは「吉賀」，「利」，「豊」など縁起の良い文字も見られます。

川の跡からは県内５例目の人面を書いた土器や，木製の人形代と木簡も出土しました。人面墨描土器と人形代は，穢れを祓う陰陽道の儀式で使用されたものです。八幡町の俵田遺跡では全国でただ一例「祓いの場」がその当時のまま見つかりました。

木　簡

木簡は紙の代用品として現在のカードや荷札などの用途に使われた薄い木の札です。

小刀で削ることにより訂正し再び使うことができました。このため古代の役人は小刀を携帯しており「刀筆吏」と呼ばれました。

なお「添削」ということばも，この木簡の訂正箇所を削る行為から生まれたものです。

上高田遺跡では木簡が７点出土しています。呪いに使用した呪符木簡３点。種籾の入った袋を管理するために付けた荷札と考えられるもの２点。人名が９名読みとれる召喚木簡とみられるもの１点です。召喚とは公的機関が人民を呼び出すときの名簿を兼ねる命令書です。それと現在解読中にある右頁写真の１点です。

上高田遺跡

上高田遺跡は飽海郡遊佐町にあります。鳥海山から流れ出ている庄内高瀬川により形つくられた沖積平野の自然堤防の上に立地しています。周囲には奈良・平安時代の遺跡が数多く見つかっています。平成６年と８年，９年のつごう３次の発掘調査がおこなわれました。１次調査はほ場整備に係る調査で，河川跡から平安時代初期の土器と木製品が出土しています。

２，３次調査は国道345号の改築工事に係る調査で，１次調査で確認された河川跡を中心に調査を行いました。

（齋藤　健）

墨書土器

標準光での撮影

赤外線テレビによる撮影（拡大）

「弓削連」
ゆげのむらじ

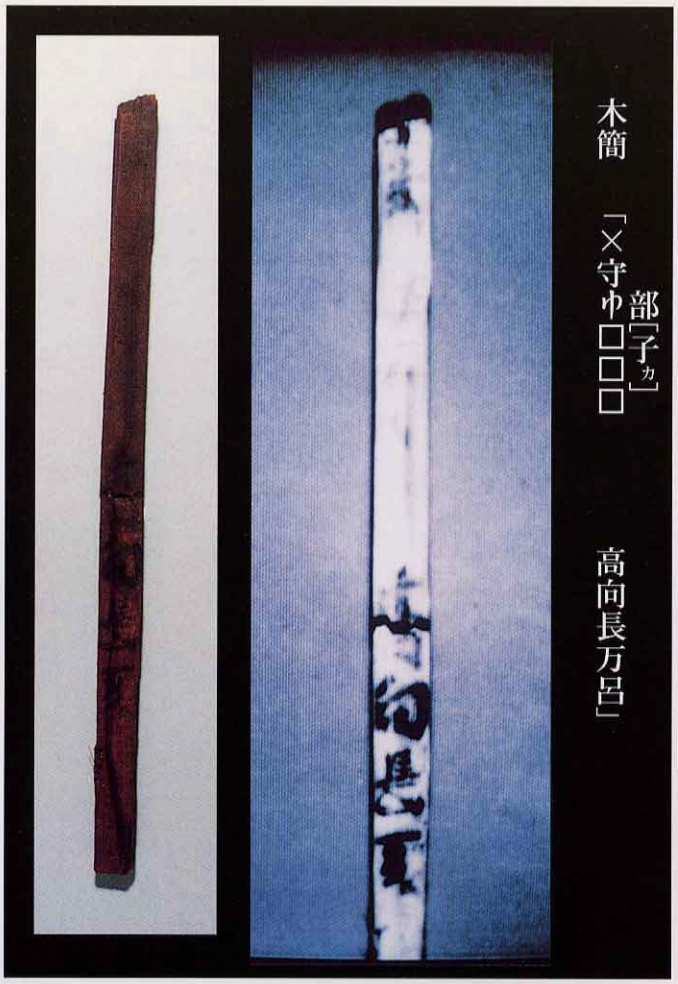
赤外線テレビ

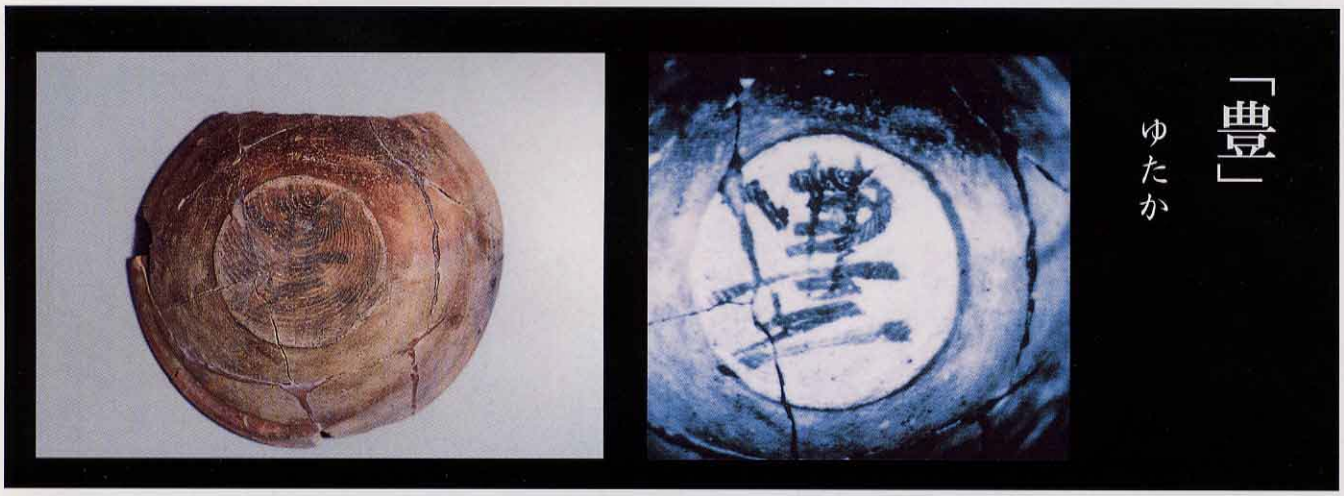
光は電磁波の一種で波長の長短により色が変化します。肉眼で感じる範囲の光を可視光線と呼びます。それより波長が短い紫外線，波長が長い赤外線とに分けられます。

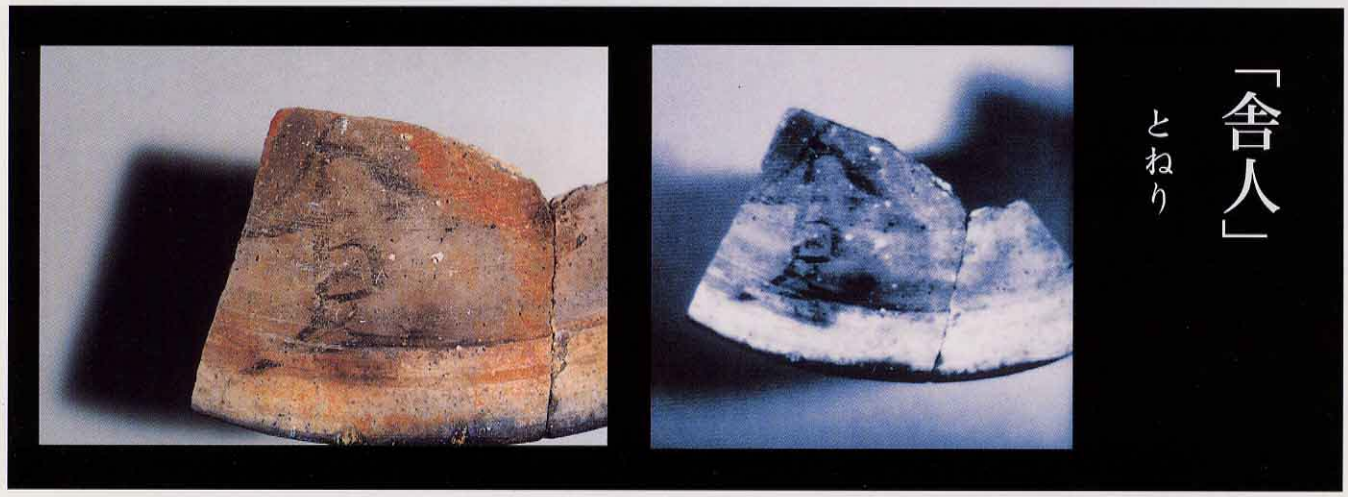
赤外線や紫外線は可視光線と反射率が異なります。赤外線だけを通すフィルターを通すと，肉眼では見えにくい物も見えやすくなります。

とくに炭素（墨）は赤外線をよく吸収します。その性質を利用して墨書文字を赤外線カメラで解読するのです。

赤外線テレビを使った解読の様子







埋文センターのうごき

環境考古課程に参加して

調査研究員　齊藤主悦

10月14日早朝，前泊した奈良国立文化財研究所の研修棟から平城宮に散歩に出ました。朝日に照らされた平城宮が大きく見えたのを覚えています。これが10月30日まで約二週間の平成9年度「環境考古課程」研修の始まりでした。

研修は自然科学の講義が主で，それに幾つかの実習も体験しました。松井章先生をはじめ17名の講師の方々にお世話になりました。

年輪年代，動物骨，人骨，大形植物遺体についてなどの講義につづき，試験管を持ち，プレパラートを作り顕微鏡を覗くこともしました。また骨の山を前にしての分類作業などは，未体験ゾーンに足を踏み入れた感じがしてわくわくしました。

日中の講義が終了すると，さらに講師の先生方や研修生と持ち寄った地酒を酌み交わしながらの研修が始まります。あまり度が過ぎると翌日の講義は非常に厳しく感じられたものでした。この二つの研修は毎日続きましたが，どちらも欠かすわけにはいきませんでした。

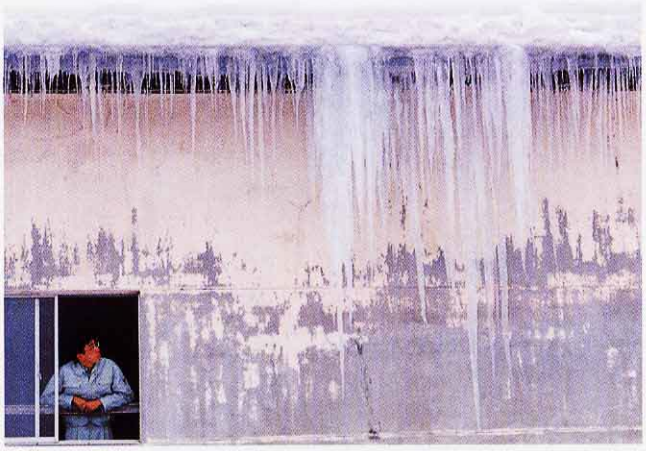
講義と実習はもちろん，講師陣との交流，北は北海道から南は九州の，全国から集まった研修生18名との情報交換が非常に有意義でした。

この研修を受けて感じたことですが，自然科学者からみると，どうも考古学に携わる人間たちは理解に苦しむらしいことも分かりました。客観的な分析データは，事実として素直に受け入れることが必要であることを学んだことも収穫のひとつです。この成果をこれからの調査に活かしたいと思います。特に自然科学的方法を積極的に取り入れて，遺跡における古環境の解明に全力を尽くします。

種子の同定実習

土壌水洗実習

動物骨分類実習


この冬,管理棟にできた身の丈以上のつらら

編集後記

山形県立博物館の金山耕三副館長，阿部明彦学芸主査，佐久間洋研究員からは，種子と貴重な写真の提供を頂きました。あらためてここに記して感謝申し上げます。

今年は暖冬ですね！などという会話がセンター内で交わされたのは，年末から正月にかけてでした。タンポポの可憐な花と種子が同時に楽しめる暖かい冬，と細笑んでいたのも束の間でした。雪国に雪が降らなければ今年の農作物にも影響がでますしね。（郊）